《正岡子規（36）の続き》その295

天涯茫々生

河東碧梧桐の続き。

二高退学後、上京して子規の俳句革新運動に加わる。新聞「日本」、松山から東遷後の句誌「ホトトギス」、その他各種の新聞の俳句欄、文化欄、三面主筆などをつとめた。

子規は碧虚の二人については、はじめは碧梧桐の方に重きをおいていたが、次第に虚子に傾いていった。虚子を道灌山に招き、後継者たらんことを望むなどにそのことはあらわれている。

句風の相違は、子規生前からきざしていたが、明治36年いよいよそれがはっきりした。

以後の碧梧桐の俳句は、定型から新傾向、新傾向から無季、自由律、ルビ附き句と大きく変化していくが、俳壇に最も大きな影響を与えたのは、新傾向時代である。

そもそも新傾向の語は、大須賀乙字の論文「俳句界の新傾向」（「アカネ」明四一・二創刊号）に由来する。それまでの碧梧桐の句風から出ている。

碧梧桐は子規の歿後、そのあとを継いで新聞「日本」の俳句欄の選者となるが、この頃から虚子、碧梧桐の句風の相違は明らかになり、虚子の伝統的、碧の現実的写実的態度となった。

明治37年秋頃から39年夏にかけて、碧は盛んな気運の醸成に努め、周辺に多くの俊秀を集め、俳壇は碧梧桐を中心にして燃え上った。

あたかもその頃、虚子は「ホトトギス」と俳書堂の経営に腐心していて、「ホトトギス」に漱石の「猫」や「坊ちゃん」を載せ、同誌が一時は俳誌よりは文芸誌の感を呈し、本人も俳句を顧みず、小説を多作していた時代である。

この気運に乗じ、碧梧桐は明治39年から44年にかけて全国を遍歴し、新傾向運動をまき起し、俳壇を風靡した。旅行は大谷句佛上人の援助によるもので、毎月留守宅30円、旅費60円の援助という。

その旅行記は「三千里」「続三千里」として、一日一信の形であらわされた。北海道の根室の果まで来ている。もちろん、札幌にも来た。

海凍る国に鮭鮓甘きかな（根室）

貸家に厩（うまや）あるなり落椿（札幌）

「続三千里」の明治44年3月12日に紀伊田辺で、当時既に有名であった粘菌学者の南方熊楠に会う一条など、俳句とは関係のないことながら、南方氏の奇行を伝える珍しい文章といえる。南方氏が朝からビールをガブ飲みしながらの放談で、東京共立学校時代の同窓、正岡子規や、日本海海戦で有名な秋山眞之参謀（これも同窓）の話なども出ている。

碧梧桐の態度はたしかに時代に応じた進歩的なもので、俳句及び俳人に始めて近代性を帯びさせるものであったが、その急進にはまた拙速、独走的なものがあった。そして次第に季題にも定型にもとらわれない作を試み、自由律俳句を展開するに至る。大正4年「海紅」を創め、自由律に転じた。大正9年末から一年餘欧米を漫遊、帰朝後「海紅」と断った。同人との意志の疎通を欠いたことによる。

更に個人誌「碧」、続いて「三味」を創刊した。「三味」には「我等の立場」と題して、彼の俳論としては最大にして最後の長文二十四回を連載した。主張と共に実作を発表したが、次第に無季、自由律と進展して行って最後にはルビ附きなどの句（？）も作った。

築落（オチ）の奥降らば鮎（コ）はこの尾鰭（オヒレ）る

（昭和六年）

などは、一読しただけでは意味も分らぬようになった。もう俳句とも云えないようだ。最後には自らも「詩」と称している。

俳句ではなく詩となり、遂に行き詰り、昭和8年3月25日、還暦祝賀会の席上、俳壇引退を表明した。

俳壇引退後の碧梧桐の生活は淋しいものであったが最晩年、門人らの好意で淀橋区（現新宿区）戸塚に新居を得た祝宴を催したのが、昭和12年1月22日で、その一週間後の2月1日にはもうこの世を去った。

評論家山本健吉は、碧梧桐も虚子も、子規にうかうかと乗せられて、俳句の世界にはいり、うまうまと大家にのし上ったと云っている。そうともとれる。